

現場の実践から  
未来を見通す

今後に生きる！

## 臨時休業下の2校の取り組み

臨時休業下でも、大学入試や就職活動を控えた高3生の学びが止まらないよう、教師は生徒をどのように支えたのか。4月の早い段階からオンライン授業を始めとする様々な取り組みを試行してきた2つの高校に、実践のポイントや今後の展望について聞いた。

### 東京都・私立新渡戸文化高校

## 臨時休業を生徒の自律性を育む機会と捉え、生徒の声を尊重しながら、教師と生徒が学びを共創する

「自律的学習者の育成」を教育活動の目標の1つに掲げる東京都・私立新渡戸文化高校は、臨時休業下にあっても、その目標を達成するための教育活動を推進することを、改めて全教師で共有。取り組みの1つであるオンライン授業は、生徒に考えを聞くことを起点に構築していった。

### すべての生徒が安心して学べる環境を整える

東京都・私立新渡戸文化高校は、2019年度、これからの時代に求められる教育活動の再構築に向けた学校改革に着手した。最上位目標を「子どもたちの幸せにいかに関与す

るか」とし、それを達成するための上位目標として、「自律的学習者の育成」を設定。社会との接続や学習意欲の向上をねらいとした、探究学習や教科横断のクロスカリキュラム（\*1）などを教育活動の中心に据え、教師は、生徒との対話を通じた支援を貫いてきた。

そうした中、同校も、新型コロナウイルス感染症の予防のため、20年3月2日から臨時休業に入った。その数日後には、生徒の自宅に課題を送付するとともに、オンライン学習ツールを紹介し、自律的に学習するよう、生徒に呼びかけた。一方で、臨時休業は長引くと予測し、今後の



高橋純司  
高1学年主任  
教職歴26年。同校に赴任して1年目。社会科。



山藤旅間  
統括校長補佐  
さんどうりよぶん  
教職歴16年。同校に赴任して2年目。理科。

#### 東京都・私立新渡戸文化高校

- ◎新渡戸文化学園は、子ども園、小・中学校、高校、アフタースクール、短期大学を擁する総合学園。そのうち高校は、1927年、経済学者・森本厚吉理事長の下、女子文化高等学校として開校。翌年、新渡戸稲造を初代校長として迎える。普通科には、美術・音楽・スポーツ・クッキング・特進医療理系・特進文系の6つのコースがあり、共通履修科目のほか、コース別の専門的な授業を展開。
- ◎設立 1927（昭和2）年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約100人
- ◎2020年度入試合格実績（現役のみ）  
私立大は、青山学院大、学習院大、成城大、明治大、立教大などに延べ50人が合格。
- ◎URL <https://www.ntobebunka.ed.jp/high/>

\*1 本誌 2020年2月号「実践 アクティブ・ラーニング」(P.30-33) 参照。

### 図1 「未来の授業づくりに向けて」教師が話し合った問い

#### ◎3月末 コロナ問題の長期化を予測して

- Q. コロナ問題の長期化に向けて、学校は何を最上位目標にするか？
- Q. 生徒の「安全」のために学校はどのようにするか？
- Q. 生徒が「安心」して学べる環境をつくるために、学校としてどうするか？
- Q. 予測不可能な時代（今の状況を含む）を生き抜くために、「必要な力」とはどんな力か？
- Q. 教科の課題をウェブサイトで掲示したり、郵送したりすることで、「必要な力」を育めるのか？
- Q. 人（生徒）は、授業があって、課題があるから学ぶのか？
- Q. オンラインツールを、何のために、どのように活用するか？
- Q. いつ、生徒たちに今後の方針を伝えるか？

#### ◎4月から オンライン授業をスタートするにあたって

- Q. ICT環境が良好ではない生徒に、どのように対応するか？
- Q. オンライン授業でできることは何か？ できないことは何か？
- Q. オンライン授業を通して、生徒たちとどのような授業をつくっていきけるか？
- Q. 学校が再開した時にもつなげる授業デザインとは？
- Q. 今だからこそ、どんな授業に挑戦できるか？
- Q. 今までの授業のあり方で見直すことはないか？

3～4月に教師が話し合ってきた問いをプリントにまとめ、生徒や保護者に配布し、学校の教育方針への理解を深める一助とした。

\* 学校資料を基に編集部で作成。

教育方針の目線合わせをするため、新年度の教育活動のあり方について、全教師で議論した。山藤旅聞統括校長補佐は、次のように語る。

「現状においては、『生徒や教師の命を守る』ことが最優先である点を確認した上で、生徒が自宅にいても安心して学べる環境をつくるためにはどうすればよいか、生徒に必要な学びは何かといった点について、全教師で意見を出し合いました（図1）。そして、双方向でコミュニケーション

ションができるオンライン会議ツールの活用が最適であるという考えに至り、4月からのオンライン授業の実施が決まりました」

早急に教育活動に利用できるオンライン会議ツールを洗い出し、それらを初めて使う教師のために研修を実施。実際の授業は、ツール活用経験者と未経験者がペアで行うようにした。デバイスは、生徒所有のものを利用することにし、各家庭のICT環境を確認。デバイスを用意す

ることが難しい家庭には、学校所有のタブレット端末を貸与するなどして、全生徒が家庭でオンライン会議ツールを活用できる環境を整えた。そして、4月3日の登校日に、生徒にオンライン会議ツールのアカウントを配布。翌週の6日から、オンライン授業を開始した。

### 生徒の学び意欲が 教育活動の羅針盤

オンライン授業の開始にあたっても、同校はそれまでと同様に、まずは生徒の声に耳を傾けた。

「想定外の事態であっても、教師の思い込みや推測で生徒に必要な学びを決めてはならないと、教師間で共有しました」（山藤先生）

「教科の授業をしてほしい」という意見は、高3生から真っ先に上がった。そこで、高3学年団は、すぐに時間割を作成し、教科のオンライン授業を始めた。同校には、希望進路に応じた6つのコースがあるため、必修科目を中心としつつ、各コース独自の科目も時間割に組み込んだ。希望進路に応じた学びの場の保障も、生徒の安心に直結するためだ。

高1・2生からは、感染への不安が相次いで上がったことから、新型コロナウイルスに関する調べ学習を教科学習に先行して行った。新年度の教育活動のあり方の検討中心メンバーだった高1学年主任の高橋純司先生は、次のように語る。

「生徒は、京都大学の山中伸弥教授が発信しているウェブサイトで調べた内容を発表しました。専門家の知見や学術データに触れる中で、『自分が感染していると思って行動すべき』『生活様式を見直さないといけない』といった意見が多く出ました。当事者の1人として今回の事態にどう向き合うべきかを、生徒一人ひとりが考えていました」

オンライン上でも全学年で、安心・安全な場づくりを大切にしている。例えば、グループワークは当初10人で行っていたが、「全員が話せるようにしたい」という生徒の声を受けて、1グループの人数を減らすなど、授業の進め方を柔軟に変更した。

そうして4月が終わる頃、高1・2生からも「教科の授業を受けたい」といった声が聞かれるようになり、5月からは全学年で教科のオンライン授業が行われることとなった。

## 平時よりも短い授業だからこそ その後の学習をより意識した内容に

5月からのオンライン授業の時間は、3学年とも、平時の1日7コマを2つに分け、第1週を1日4コマ、第2週を1日3コマとし、2週間で平時の1週間分とした。そして、1コマは30分間とし、14時までに授業を終えるようにした（写真）。

「長時間、タブレットなどの画面を見てみると、生徒の集中力は落ちていきますし、一定の時間を超えるとオンライン会議ツールの利用は有料になります。費用は必要最低限に抑える方針でしたので、オンライン会議ツールの利用が無料の時間内に収まるよう、1コマを30分間としま



写真 大半の教師が自宅でオンライン授業を実施。オンライン授業に不慣れな教師に、生徒がオンライン会議ツールの使い方を教えることもあった。

した。そのため、生徒には自由に使える時間が平時よりも増えました。その時間をいかに活用するかが重要になると、生徒に伝えていきます」（高橋先生）

平時より短い授業のため、どの教師も授業内容を厳選し、進め方も工夫している。例えば、高3学年の英語では、対面授業で行っていたグループワークをオンライン授業でも取り入れ、対面授業の時よりもその比率を高くした。生徒同士の学び合いによって、理解不足の部分を補い合えるようにするためだ。

課題では、オンラインツールで問題を出すと取り組み状況などの集計がしやすいことを利用し、その日の授業内容を振り返る問題を出している。生徒の理解度を確認し、その結果を授業づくりや生徒の個別支援に生かしている。さらに平時と同様に、解答に際して教科書や辞書を参考にしてもよいと指示を出して、出題の意図を見抜く目を養うための英作文なども課している。それらの問題の正答率を確認すると、授業内容の理解度は十分と言える結果だった。

同校では、オンライン授業のほかに、国語・数学・英語と、6つのコー

スに応じた課題を出すとともに、それらの課題について教師に質問したり、生徒同士で学び合ったりすることができるオンライン自習室を、毎日、放課後に2時間半設けた。曜日ごとに各教科を割り当て、その担当教科の教師が常駐するようにした。それは、生徒の要望に応じて始めたもので、高1〜3生が学年を問わず集う、学びの場になった。

「生徒にオンライン授業の内容について聞いたところ、友人と学び合う時間ももっとほしいという声があり、オンライン自習室を設けました。教師はともすると、授業時数が足りない、教科書が終わらないと言って、課題を増やそうとしがちです。だからこそ、常に生徒目線で何をすべきか、何ができるかを考えられるよう、教師間で声をかけ合っています」（高橋先生）

高3生からは、「自由時間を活用し、苦手分野は2年次の教科書に戻って復習している」といった声が聞かれた。生徒が自分で考えて行動できるよう支援してきたことで、生徒は自身の学力や学習の状況をメタ認知し、自分に必要な学習を進めている。

## 臨時休業下でも育まれていた 非認知能力の評価も重視

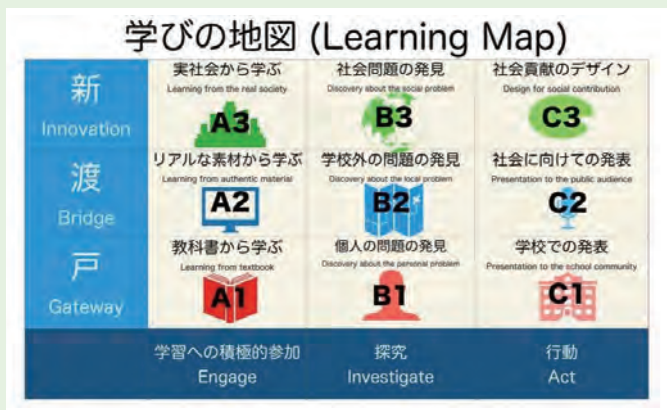
1学期中の学習についての評価方法は検討中だ。基本的には、全学年とも、単元テストなどによる認知能力の評価と、ポートフォリオなどによる非認知能力の評価を1対1として、全体の評価とする予定だ。

認知能力の評価では、各教科・科目で単元テストなどを実施しており、授業内容の定着度を測っている。高3生は、入試に向けた学力を客観的に把握するため、7月に全国規模の模擬試験の自宅受験の機会を設ける予定だ。そして、より重視して評価しようとしているのが、オンライン授業や課題の取り組み状況などに表れる非認知能力だ。

「授業の進め方を教師に提案したり、自分で学習計画を管理したりと、臨時休業中に、生徒の非認知能力は大きく伸びていると感じます。そうした生徒を見て、自律的学習者の育成を目指しながら、評価は定期考査が中心だったことに気づかされました。評価に関して改めて教師全員で勉強し、今後の評価のあり方について議論しています」（山藤先生）



図2 「学びの地図」



\*学校資料をそのまま掲載。

今後は、前年度に策定した「学びの地図」(図2)を基に、自律的学習者の育成に向けた評価方法を検討していく考えだ。

「本校では、『学びの地図』の9つの要素の育成を目指していますが、A1の『教科書から学ぶ』ばかりを評価しがちです。残り8つの要素の評価方法について、今後、本格的に議論していきます。また、A3の『社会から学』んだり、C3の『社会貢献』に取り組んだり、生徒の学

びの過程は多様であり、今まさに、生徒はA1以外の学びも経験しているはず。それらの学びをどのように支援していくのかも、同時に考える必要があると捉えています」(山藤先生)

**生徒が自身の選択に責任を持てるよう、ともに考える**

高3生への進路指導についても、自分の進路は自分で責任を持って考えるよう、教師は常に生徒に働きかけてきた。3月の臨時休業に入った時点で、大学説明会などが中止になることを見越し、インターネットを活用して進路情報を収集するように伝えた。そして、4月には、担任がオンラインで個人面談を実施し、志望校や入試方式などについてどう考えているのか投げかけた。すると、推薦入試の準備について担任に相談する生徒が出るなど、自らすべきことを考え、行動していた。

「今後、再び新型コロナウイルス

ウィルスの感染が拡大すれば、大学入試の状況が変わる可能性は大いにあります。何が最良の選択なのか分からない中でも、生徒は自分の人生を築いていかなければなりません。生徒が社会の変化をしつかりと受け止め、自分の進路選択に責任を持つよう、教師と一緒に考えようというスタンスで支援しています」(高橋先生)

オンラインツールの活用によって充実してきたのが、キャリア教育だ。生徒の提案により、卒業生や社会人をゲストに招いたオンライン講演会を各学年で実施。北海道の大学に通う卒業生、デンマークに住む留学生、千葉県の農業従事者、シンガポールで働く卒業生など、住む場所も職業も多彩なゲストを招いた。ゲストの経験を聞くことで視野が広がり、海外に目を向ける生徒も出てきているという。

また、保護者会もオンラインで実施。6月上旬に行った回の参加率は例年よりも非常に高く、今後も、オンラインツールを活用した保護者とのコミュニケーションを充実させていく考えだ。

**生徒の成長の糧となるために教師がすべきことを常に問う**

5月下旬の緊急事態宣言解除後も、同校では、6月21日までオンライン授業を継続し、6月第4週から段階的に通常授業を開始して、1学期は7月31日までを予定している(6月1日現在)。そして、平時に戻った後も、オンライン授業を週1日程度実施することを検討している。オンライン会議ツールのチャット機能を使えば発言がしやすく、それを授業参加者全員で共有しやすいといったオンライン授業ならではのよさを、今後の教育活動にも生かし、生徒の学びを支えていく考えだ。

「休業前と同じように学校行事や部活動などができない今、生徒は何をしたいと思っているのか。その何かが生徒から出てくるのを待ち、生徒が発する言葉を受け止め、前に進む支援をすることで、自律的学習者が育つと考え、教師としてすべきことを決断してきました。生徒が見えていない視点をどれだけ示し、生徒がしたいことの実現をどれだけ支援できるのかを、今後も自分たちに問いつけていきます」(山藤先生)